



第1回イマジンふれあいサロン障害者作品展

知らないことへの不安が 障害者への偏見を生む

自由な色使いの絵や絵手紙、細かい刺繍を施した刺し子、市松模様や編み込んだ籠。どれも発想豊かな作品で、見た者を驚かせるが、どの作者も障害を持っていない。市内の川越街道にある「荷縄屋」で開催された障害者作品展の様子が、虫から見た世界を再現したり、その感性には驚かされる。作品展の目的は、障害者の存在へ目を向け、理解を深めてもらうことだという。しかし、どれだけの健常者が、障害者と出会える場へ赴き、その能力を実感したことがあるだろうか。

市内に暮らす障害者へのアンケート結果（平成18年島田市障

障害者アートは「アール・ブリュット」とも呼ばれる。作者の知識や技術に頼らず、発想力のみから生み出され、純粋で無垢、加工されていないという意味で「生の芸術」と訳される。障害の有無に関わらず、才能ある芸術の担い手として認められることは、生きる自信となり、社会参加を促す。互いの「ありのままの生」を受け入れることができる意識と環境こそが、共生という花を咲かせるための、肥沃な土壌となるだろう。

心の声をアートに訳して 等身大の自分を伝える

障害者福祉計画等策定のための実態調査。それによると、日常生活の中で社会的な偏見が「常にある・時々ある」と答えた人の割合は、身体障害者が11.1%、精神障害者が31.6%、そして知的障害者に至っては40.6%に上る。

人は、知らないことに対して、不安や恐怖を感じる。実際に会えば「自分は障害者について、何も知らない」と自覚できるはずだ。そのきっかけの一つが、アートだ。障害者ではなく、自分にはない能力に注目する。知らないことを知ることから、相互理解は始まる。

理解が咲かせる共生の花

作品は障害者を考える種



声 Voice



特定非営利活動法人
イマジン
塚本美帆さん
〒343-3370
http://www3.tokai.or.jp/
imagine/index.html

障 害者といっても、一人一人がさまざまです。障害の種類はもちろん、性格や環境そして特徴も違います。彼ら地域の中で暮らしていくためには、何よりもその地域住民の理解と協力が必要です。そして、理解を深めるためには、障害を持つ当事者が、声を発する「出会いの場」が必要だ。

共に幸せになる幸せ
要ではないでしょうか。障害者が住み慣れた地域の中で、夢や希望をあきらめること無く、人として普通に暮らせる社会。それを実現するためには、障害者の主体性を尊重した支援活動が求められていると感じます。

作品は、障害者にとっての言葉であり、社会に対する彼らの自己紹介です。「地域の皆さんに、障害者の存在を知ってもらいたい」多くの人の目に作品が映ることは、彼らの人生の目標となるとともに、障害者の社会的視野を広げることにもなります。



作品は障害者にとっての自己紹介

島田のアートシーン 心の声をカタチに

陶芸 Ceramics



Sosuke Kobayashi

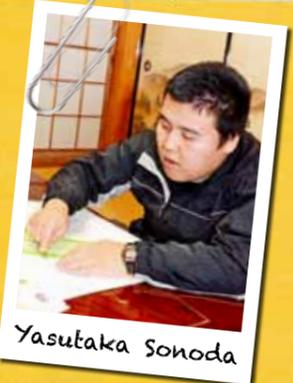
小林 壮介

こばやし そうすけさん

小林さん（24歳）は、特別支援学校時代に陶芸に出会い、現在でも週一回の陶芸教室に通っている。得意な題材は、動物の置物。図鑑を開き、モデルの動物をひと目見ると、粘土の塊から顔や手足を指で捻り出し、あっという間に作品を仕上げる。写実的だが愛嬌のある作風は、作品展示会でも好評だ。



書 Calligraphy



Yasutaka Sonoda

園田 康貴

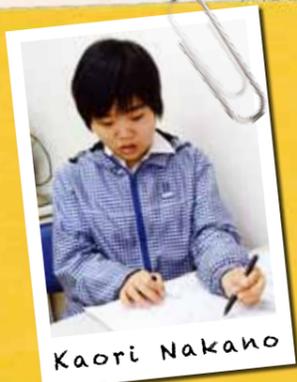
そのだ やすたかさん

これまで、絵を描き続けてきた園田さん（17歳）。今年の夏休みに毛筆を手にとった。半紙を大きく使い、時には収まりきらないほど大胆に、筆を走らせる。作品の一部は、市外の公立高校でも展示され、生徒の注目を集めている。



中野 佳織

なかの かおりさん



Kaori Nakano

点描 Pointillism

家族が家に持ち帰った点描に中野さん（17歳）が魅了されたのは、1年半前。小さな頃から絵が好きだったこともあり、見よう見まねで紙に大小の点を落とし始めた。感情や経験のイメージを膨らませて描く絵は、黒のサインペンだけしか使っていないのに、色彩を感じさせる。

